

## 高知県沿岸におけるキハダの漁況について

○宮澤 英将(高知水試)

## 1. はじめに

近年、高知県海域では海水温が経年的に上昇していること（高知県水産試験場，2017）に加えて、2017年に発生し2024年10月現在も継続している黒潮大蛇行は、本県沿岸の海況に大きな影響を与えている。さらに、室戸岬東岸の大型定置網において、大蛇行発生前（2012年～2016年）と大蛇行発生後（2017年～2021年）で魚種によって漁獲の動向に変化が見られている（林，2023）。

本県の漁業において重要魚種であるキハダ *Thunnus albacares* は、竿釣や曳縄、一本釣りといった釣り漁業と大型定置を主とした定置網により漁獲されている。近年、多くの魚種で漁獲量が減少する中、キハダは漁獲量が増加傾向にあることから、その重要度がより高まっている。このため、近年の漁況変化や海況との関連に関する知見が求められていることから、近年における本県および全国におけるキハダの漁獲状況について、その概要を報告する。

## 2. 材料および方法

2010年から利用可能な高知県漁業協同組合（以下「高知県漁協」）の販売データを用い、キハダの関連銘柄である「キハダマグロ銘柄（概ね15 kg以上）」、「メジ銘柄（7～15 kg）」、「ビン銘柄（概ね7 kg未満）」、「ヒレナガ銘柄（1 kg未満）」を抽出して集計した。漁業種別では、釣り漁業は「竿釣（大型鰹漁，19 t型鰹漁，19 t未満鰹漁を含む）」、「一本釣り」，「曳縄」，「釣り（小釣を含む）」を，定置網漁業は「大型定置」に分類された販売データを集計した。

全国のキハダの漁獲量は、水産資源調査・評価推進委託事業によりとりまとめられた「水揚地でのまぐろ・かじき・さめ調査結果（水産研究・教育機構 2020，2024）の「まぐろ類 魚種別・漁法別・年別 水揚量（2 キハダ）」から集計した。

これらの集計結果から、キハダの水揚げ状況に関する近年の概要についてとりまとめた。

## 3. 結果と考察

2010～2023年の本県におけるキハダの年別漁獲量は204～855 tで推移した。2010～2023年の14年間の漁獲量を黒潮大蛇行前の2010～2016年（以下「蛇行前」）と黒潮大蛇行後の2017～2023年（以下「蛇行後」）に区分し、漁獲量の平均値で比較すると、蛇行前は478 t，蛇行後は525 tと蛇行後が上回った。漁業種別でみると、釣り漁業では2010～2023年における漁獲量は190～663 tと年により漁獲量が大きく変動していたが、漁獲量の平均値で比較すると蛇行前は431 tであったが蛇行後には400 tに減少した。一方、定置網漁業では2010～2023年における漁獲量は5～269 tで、このうち蛇行前は5～22 tの低水準であったが、蛇行後には7～269 tと大きく増加していた。漁獲量の平均値で比較すると蛇行前は10 tであったが蛇行後には98 tに増加した。漁業種別銘柄別の漁獲量をみると、中小型のメジ銘柄・ビン銘柄に比べて、大型のキハダマグロ銘柄は釣り漁業と定置網漁業とともに近年（特に2021年以降）の漁獲量が大きく増加した。また、キハダの漁獲量増加の主な要因となっているキハダマグロ銘柄の地域別漁業種別の漁獲量をみると、釣り漁業と定置網漁業によるキハダマグロ銘柄の漁獲量は、県西部と県東部とともに蛇行前に比べて蛇行後の方が高い値となっていたが、釣り漁業が「県西部>県東部」であったが一方、定置網漁業では「県西部<県東部」となっており、漁業種別で漁獲量の多い地域が異なるといった特徴が見られた。

漁獲量の増加に大きく寄与したキハダマグロ銘柄の漁獲量が県の東西地域で増加した一方、それぞれの地域において漁業種別で漁獲の状況が異なった要因には、高知県沖を流れる黒潮が室戸岬沖に比

## 第 27 回水産技術報告会発表要旨

べて足摺岬沖で接岸傾向が強かったことにより、大型のキハダを対象とした釣り漁業の主な漁場である高知県中西部沖の浮魚礁が黒潮接岸の影響を強く受けて好漁場となったことや、東西地域の大型定置の規模（岸から定置網の設置場所までの距離や設置場所の水深）の違いなど、多くの要因が重なって生じたものと考えられる。さらに、定置網へのキハダの入網機会（有漁日数）が東西地域でも増加していることや、定置網漁業に加えて釣り漁業においてもキハダ銘柄の漁獲量が増加しているといったことから、本県沿岸へのキハダ（特にキハダマグロ銘柄）の来遊量が増加していることが推察された。

また、高知県沿岸の海況について、土佐黒潮牧場ブイの 9 号（県西部沖）、10 号（県東部沖）および 12 号（県中央部沖）で 2018 年以降に観測された流速に着目すると、高知県沿岸における大蛇行後の潮流の流速は、大蛇行前（2016 年、2017 年）および大蛇行が始まった 2017 年と比べて明らかに低下しており、13 号（西部沖）では 2020 年以降に低下している（柳川 2024）。このような海況の変化が見られた時期に、本県の釣り漁業や大型定置でキハダの漁獲増加が目立っていることから、黒潮大蛇行やそれに関連する海況の変化が、高知県のごく沿岸部へのキハダの来遊を増やす要因となっている可能性が高いものと考えられる。

全国の主要市場における 2010～2023 年のキハダの年別漁獲量は 7,808～16,248 t で緩やかな増加傾向であった。このうち、「定置網」による年別漁獲量は 25～318 t で、漁獲量の平均値と比較すると蛇行前の 41 t が蛇行後は 111 t と増加していた。こうした年別漁獲量の動向について、高知県における定置網漁業のキハダの漁獲量との関係を見ると、両者には強い正の相関（ $r = 0.9592$ ,  $p < 0.01$ ）がみられた。全国の主要市場における定置網の漁獲量は、高知県と同様に蛇行後に大きく増加しており、本県を含む多くの沿岸域において定置網が設置される沿岸部まで回遊する海況条件（海水温の高い期間の増加、沿岸部への外海水の流入等）が揃ったことが、定置網による漁獲量増加の一因と推察された。